

# 大学生の友人関係における 対人葛藤の終結までのプロセス —複線径路・等至性モデル に基づいて—

1

明治学院大学大学院  
岡本 悠・いとうたけひこ・井上孝代

連絡先: [hisashiokamoto.trb@gmail.com](mailto:hisashiokamoto.trb@gmail.com)

## はじめに

- 青年期においては、価値観の異なる友人同士の親密な関係形成が発達の課題の一つ。
- 学生相談室での相談の多くは、友人との関係など対人関係にまつわるもの（小林・西垣・相沢・橋本, 2003 ; 高橋, 2010)



対人葛藤(=コンフリクト)に悩んでいる？



対人葛藤の解決は重要な課題の一つといえる。



● 対人葛藤が終結するまでのプロセスを探る。

# 問題(1)

## 対人葛藤とは

- 「個人の行動、感情、思考の過程が、他者によって妨害されている状態」(Kelly, 1987)
- 「個人の欲求や期待が他者によって阻止されていると個人が認知することによって生じること」(Thomas, 1976)
- 本研究においては、加藤(2003)などに従い、  
「個人の行動、感情、思考の過程が、他者によって妨害されている状態」(Kelly, 1987) と定義する

# 問題(2)

## 対人葛藤方略の分類

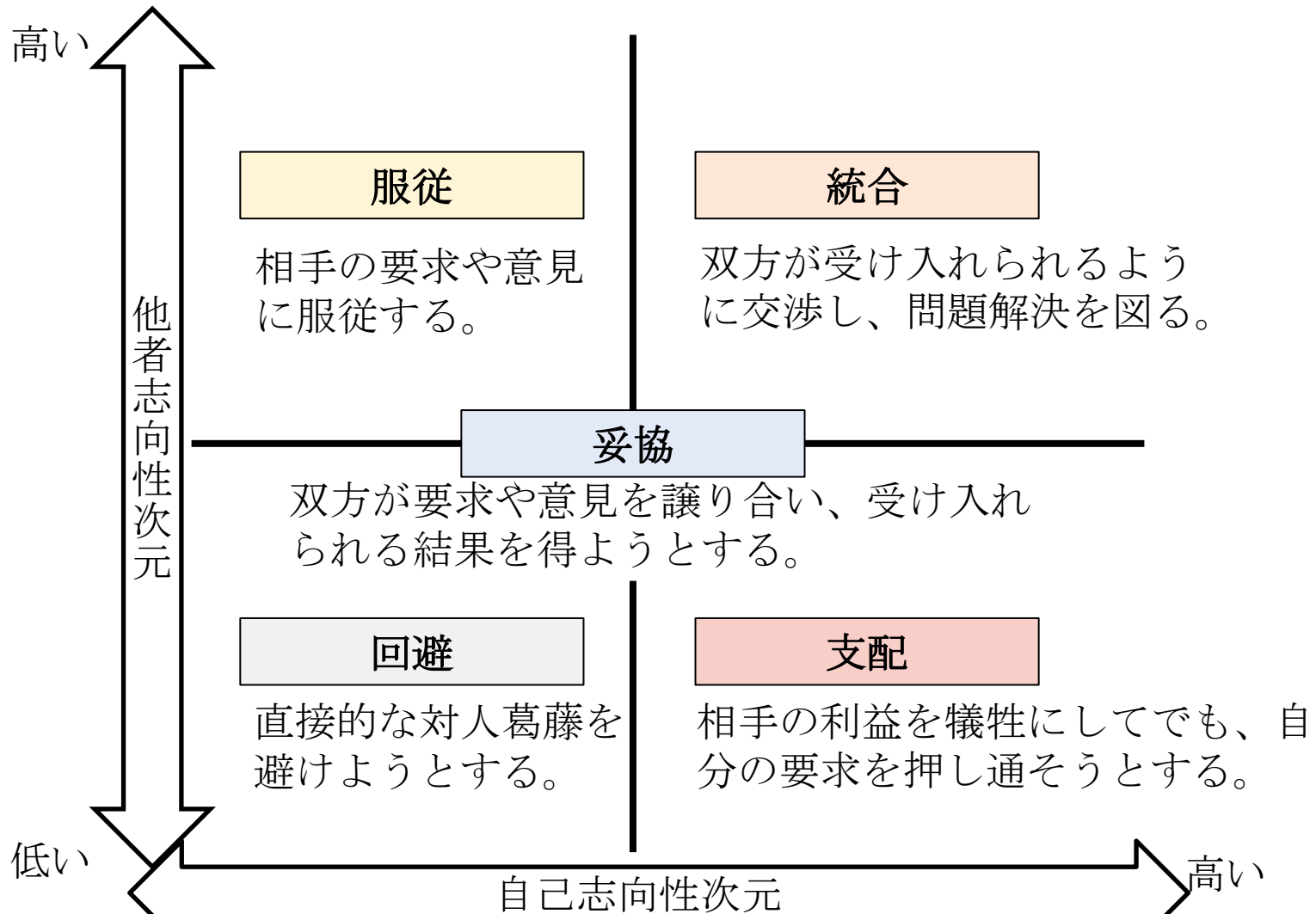


Figure I 二次元5タイプモデルに基づく対人葛藤方略の分類  
(Rahim & Bonama, 1979 ; 加藤, 2003を基に作成)

## 問題(3)

### 対人葛藤方略に関連する要因

- 性要因 (深田・山根, 2003)
- 寛容動機 (高田・大渕, 2009)
- パーソナリティ要因 (加藤, 2003 ; 小松・大渕, 2007)

など

- 決定係数、相関係数は概ね低く、要因間の関連も不明。
- 対人葛藤の原因と向き合い、状況を把握した後、自分と相手の本心や感情に視点を向けるというプロセスが重要(井上, 2005)。



質的なプロセス研究の観点から捉え直す必要がある

## 問題(4)

# 対人葛藤に関する質的研究

- 対人葛藤の解決までのプロセスに関する研究が僅かにあるのみ。

たとえば・・・

対人葛藤が解決するまでの一般プロセス(吉野, 1987)。

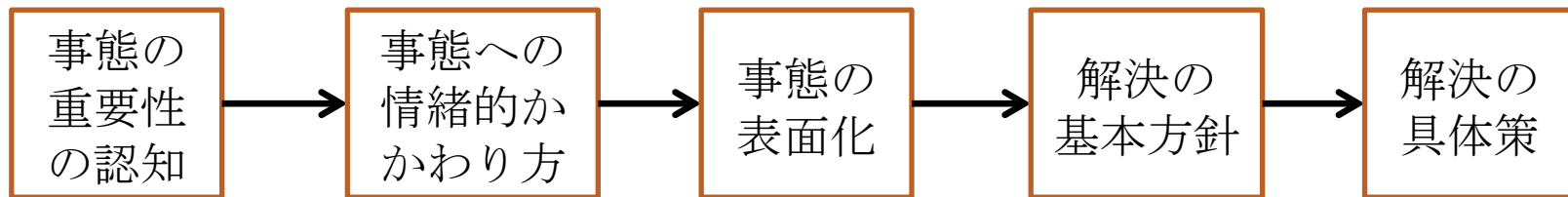


Figure 2 対人葛藤が解決するまでのプロセス(吉野, 1987を参考に作成)

# 問題(5)

## 問題のまとめ

### ●先行研究：

対人葛藤方略、対人葛藤方略の関連要因、  
プロセスに関する研究 など

### ●先行研究で明らかにされていない点：

- ①決定係数や相関係数の高い関連要因
- ②時間的経過を踏まえた終結するまでのプロセス



対人葛藤が終結するまでの実証的なプロセスを探る。

# 本研究の目的

- 本研究の目的は、大学生の友人関係における、対人葛藤が発生してから終結するまでの、実証的なプロセスを明らかにすることである。
- その際、本研究においては、時間的経過に着目した方法論である複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model ;TEM) に基づく。



# 方法

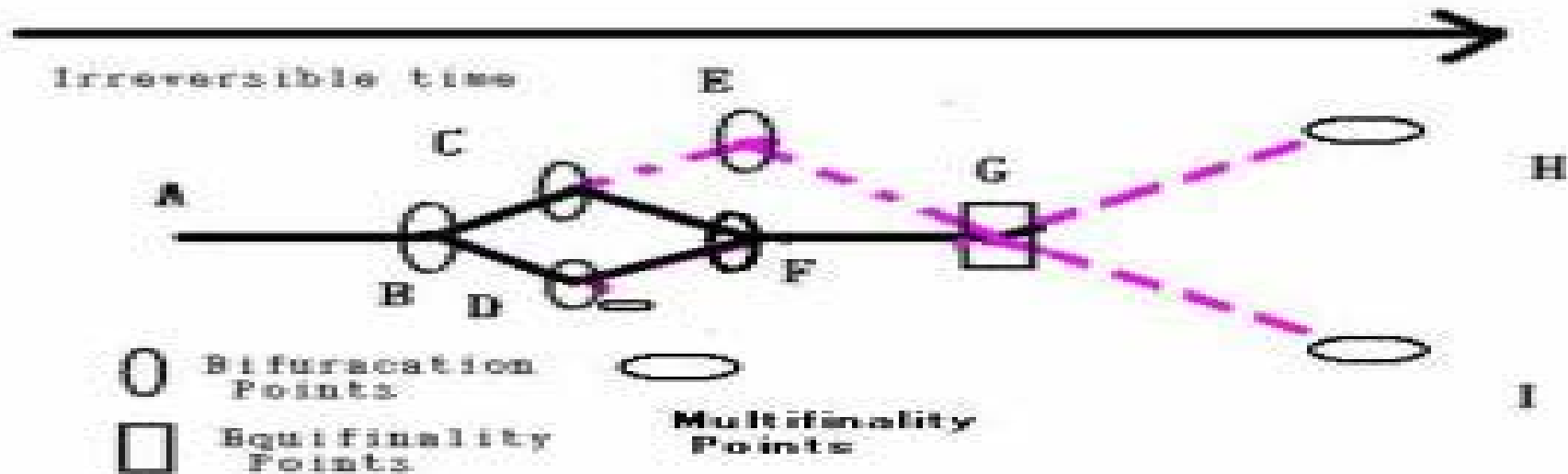
- 実施時期：2011年8月下旬
- 対象者：大学生男女13人(男性2人、女性11人)
- 教示：

「あなたが大学生になってから遭遇した、友人との間での対人葛藤(コンフリクト)について、発生してから終結するまでのプロセスをできる限り詳しくお書きください。」

という教示のもと、自由記述で回答してもらった。
- 分析：
  - 心理学を専攻する学生、大学院生、教員で複線径路・等至性モデル(Trajectory Equifinality Model ; TEM、サトウ, 2009)の手法に基づき行った。なお、Kelly(1987)に該当すると判断される5名の記述を対象とした。

# 複線径路・等至性モデル

(TRAJECTORY EQUIFINALITY MODEL ;TEM)とは



(Figure 3 TEMの概念図(<http://www.k2.dion.ne.jp/~kokoro/TEM/whatistem.html>より引用)

- 個人の人生や経験を、非可逆的な時間と共に描くことを目的とした方法論(サトウ, 2009)。
  - B : 分岐点 (Bifurcation point)
  - F : 必須通過点 (Obligatory passage Point)
  - G : 等至点 (Equifinality point)
- 対人葛藤研究においても 時間的経過の中でのプロセスを 追うことに適していると考えられる。



# 結果

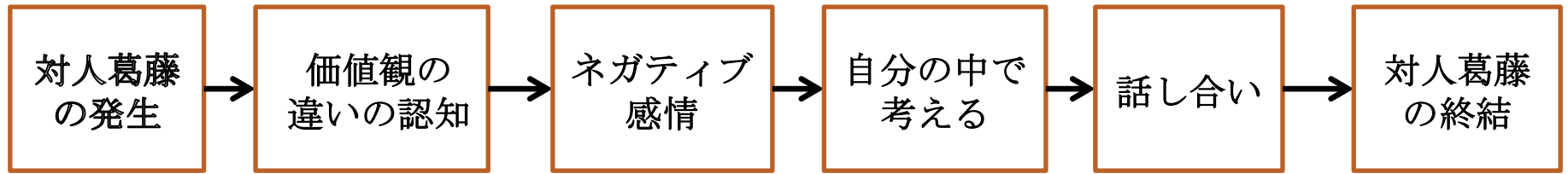


Figure 4 対人葛藤が終結するまでのプロセス

- 「ネガティブ感情」、「自分のなかで考える」、「自分の考えや気持ちを伝える」という記述は、それぞれ5名中4名から得られたため、必須通過点とみなした。
- 「終結」においては、「和解して終結」するものと、「不満を抱いたまま受け入れて終結」するものという、二極化した等至点が得られた。

# 考察(1)

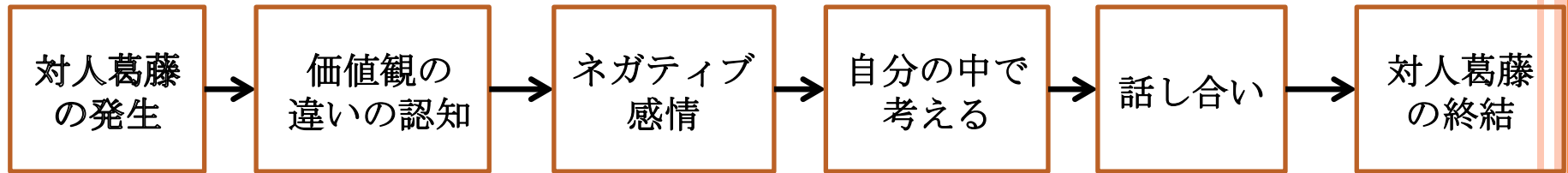


Figure 4 対人葛藤が解決するまでのプロセス

- 経時的・非可逆的時間の経過を踏まえた、実証的なモデルを提案している。
- 上記のプロセスは、「統合」方略に該当すると考えられる。
- 相互理解を得ることでネガティブ感情が解消されたと考えられる点において、「統合」方略が望ましい方略であると質的研究の観点からも示唆された。
- 表面的に対立する意見を受け入れられるものに調節するだけでなく、湧き上がってきた葛藤的な認知やネガティブな感情を吟味し、話し合い、相互理解を得るというプロセスが重要である可能性。

## 考察(2)

- 対人葛藤が終結するまでの具体的なプロセスが示された点において、TEMは対人葛藤研究に適合した手法であると考えられる。
- 時間的な経過の中での認知や感情、自分の中で考えるという、個人内のダイナミックなプロセスを得られるという点においても、TEMを用いることは有益と考えられる。
- 当事者間の相互作用という側面を捉えるには限界がある。
- 現実的な出来事と、個人の内界が入り混じったプロセス図であり、より精緻なプロセスを明らかにすることが望まれる。

## 今後に向けて

- 本研究では、TEMを用いることにより、「対人葛藤の発生」→「価値観の違いへの気付き」→「ネガティブ感情」→「自分の中で考える」→「自分の考えや気持ちを伝える」→「和解して終結」という、時間的経過の中での実証的なプロセスを得られた。
- 本研究では、男女比が方偏っていた上、自由記述形式の質問に回答してもらう形で記述を得たためデータの詳細さが調査協力者によってまちまちであった。
- 男女比に留意した上で、半構造化面接などの形でデータを得ることで、より精緻なプロセスを明らかにできると考えられる。
- そこから得られる知見によって、対人葛藤が終結するまでのより詳細なプロセスが明らかになるだけでなく、第三者がどのように介入し得るか、といった示唆も得られると考えられる。

# 主要引用参考文献

- Blake, R. R. & Mouton, J. S. (1970). The fifth achievement. *Journal of Applied Behavioral Science*, **6**, 413-426.
- 深田博己・山根弘敬 (2003). 大学生の対人葛藤解決方略に関する研究 広島大学心理学研究, **3**, 31-49.
- 福島 治・大淵憲一・小嶋かおり (2006). 対人葛藤における多目標：個人資源への関心、評価的観衆、及び丁寧さが解決方略の言語反応に及ぼす効果 社会心理学研究, **22**(2), 103-115.
- 羽生寛奈 (2009). 対人葛藤事態への捉え方がストレスに及ぼす影響についての検討 帝塚山大学心のケアセンター紀要, **5**, 51-52.
- 井上孝代 (2005). あの人と和解する—仲直りの心理学— 集英社新書
- 加藤 司 (2003). 大学生の対人葛藤方略スタイルとパーソナリティ、精神的健康との関連性について 社会心理学研究, **18**(2), 78-88.
- Kelly, H. H. (1987). Toward a taxonomy of interpersonal conflict process. IN O. Stuart & S. Spacapan(Eds.), *Interpersonal process*(pp.122-147). New York:Sage.
- 小林正信・西垣順子・相沢 徹・橋本 功 (2003). メンタル・ヘルスの相談事例から見る学生の諸問題—その2— 教育システム研究開発センター紀要, **9**, 119.
- 古村健太郎・戸田功二 (2008). 親密な関係における対人葛藤 北海道教育大学紀要(教育科学編), **58**(2), 185-195.
- M Afzalur Rahim (1983). A measure of Styles of Handling Interpersonal Conflict *The Academy of Management Journal*, **26**(2), 368-376.
- 長沼恭子・落合良行 (1998). 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, **10**, 25-47.
- 岡田 努 (1993). 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, **5**, 43-55.
- 岡本 悠・いとうたけひこ・井上孝代 (2012). 大学生の友人関係における対人葛藤の終結までのプロセス—複線径路・等至性モデルに基づいて— 投稿中
- 大淵健一 (1991). 対人葛藤と日本人 高橋順一・中山 治・御堂岡 清・渡辺文夫(共編) 異文化へのストラテジー(pp.161-180) 川島書店
- Ralph H. Kilmann & Kenneth W. Thomas (1975). Interpersonal Conflict-Handling Behavior as Reflections of Jungian Personality Dimensions *Psychological Reports*, **37**(3), 971-980.
- 坂本 剛 (2005). 2種類の回避型葛藤方略に関する一研究 名古屋産業大学論集, **6**, 53-57.
- 高田奈緒美・大淵憲一 (2006). 対人葛藤における寛容性の研究：寛容動機と人間関係 社会心理学研究, **24**(3), 208-218.
- Thomas, K. W. (1976). Conflict and conflict management. IN M. Dunnette (Ed.), *Handbook of industrial and organizational psychology*(pp.889-938). Chicago: Rard McNally.
- 遠矢幸子 (2005). 友人関係における対人葛藤の解消プロセスに関する研究 香蘭女子短期大学研究紀要, **47**, 69-75.
- サトウタツヤ編著 (2009). TEMではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして— 誠信書房
- 吉野絹子 (1987). 対人的葛藤の解決過程の分析(1)—葛藤に対する反応パターンとその類型化— 社会心理学研究, **2**(2), 35-44.